

高橋明也・三菱一号館美術館館長が講演



(上)穏やかな口調で話をする高橋明也さん
(下)時に笑いを誘うお話で会場と一体に



2014年1月19日に東京・杉並の「セッション杉並」で、三菱一号館美術館館長・高橋明也さん（高校24回）を迎え、第2回同窓生講演会を開催した。会には、幅広い年代の卒業生約80人が参加。高橋さんご本人が「熱心に聴いていただきました」と感想を述べるほど、一体感のある会になった。富士高校で20年、美術の教師を務められ、高橋さんの担任でもあった佐藤美智子先生にもご来場いただいた。

19世紀のフランス美術を研究テーマとし、西洋美術館学芸員・オルセー美術館開館準備室の客員研究員を経て、2006年、丸の内・三菱一号館美術館初代館長に就任された高橋さん。「美術館で働くということ」というタイトルをいただいて、期待が膨らんだ。

ただ、同窓生の講演会なので、高橋さんには「ぜひ、高校生時代のお話を織りまぜてください」とお願いしていた。その通りに子どもころの話から、講演は始まった。

小学6年生での経験、ご家庭の教育のあり方、高橋少年が出会った大人たち、すべてが私たちの意表をつく、スケールの大きなものだった。

1965年パリ大学の交換教諭としてお父様が渡仏される際、ひとりっ子であった12歳の高橋さんも、ご家族と一緒に40

日間船に乗りアジア・アフリカの地に寄港しながらマルセイユまで行く。その間に、悲惨なこと、素晴らしいことを見聞きした。その「ディープな」体験がいまの高橋さんを作ったのだろう。

その後のパリで生活した1年間も高橋さんの感受性を高めたようだ。大人たちに混じってフランス語を学び、ルーブル美術館へは守衛さんと顔なじみになるほど通った。両親とともにヨーロッパ各地を訪れた。

高校卒業時には、「ジャーナリストになりたいとか、建築関係も好きだとかいろいろ迷った」と言う高橋さんが、それでも、いまの道を歩み続けているのは、これらの体験が下地にあるからなのだろう。

東京芸術大学を卒業後、学芸員として就職された西洋美術館では、ご自身がメインに関わった展覧会は12～13本。「ジャポニスム展」「バーンズコレクション展」「ジョルジュ・ド・ラ・トゥール展」など、人気を博した展覧会の裏側のご苦労を披露された。「ドラクロワ展」は、フランスの地方の美術館の収蔵庫を一つひとつ当たった、手作りの展覧会であったという。今でも高橋さんは、この展覧会を手掛けた学芸員として、フランスで名が通っているそうだ。そうした積み重ねが、2010年のフランス芸術文化勲章シュバリエ受勲につながった。

国公立の美術館に比べ自由度が高く、歴史的建造物を復元したランドマーク的な存在である、三菱一号館美術館で意欲的に仕事を続けておられるいま、気になっていることは「日本の美術館に若い人の姿が少ない」ということ。高橋さんの生い立ちから始まるお話を伺いながら、私たちがひしひしと感じたのもまた、「未来を創る子供たちに対する大人としての責任」であった。

とても意義深い1時間半だった。

(落合恵子)



佐藤先生に花束贈呈。同窓生講演会ならではの光景